

□ ■ INDEX □ ■

- 1 年賀状—欧米か！
- 2 投稿 「終末」の終わり
- 3 連載 リアホナを斬る (第11回) 木塚灯八
霊的な知識の探求——ポイド・K・パッカー
- 4 連載 思い出す 私と勇気と真実の会 (1) るう
会の設立まで
- 5 おしらせ

■ 年賀状—欧米か！

新年ということでわが家にも年賀状が来た。現在もモルモン教に在籍しているかたで、まだお付き合いの続いている方々からも頂戴する。それらを読んで気がついた。昔は熱意のこもったものが多かった。モルモン教への証し、新年の信仰への決意が述べられていた。中には「早く教会に戻りなさい」と新年早々縁起でもないものもあった。しかし、だんだんとそのような気合の入ったものは少なくなっている。今年はほとんどが一般の年賀状と同様、家族の消息程度だ。年賀状からもモルモン教の勢いが感じられる。

ところで一通だけ家族がモルモン教会のどんな責任にあるかが書いてあったものがあつた。そこには「* * 第一顧問」と書かれていた。モルモン教の役職名変更を知らなかった妻が「これ、何？」と言う。職、責任の名称が変わったことを教えて、監督などは英語になったことを教えたと、「欧米か！」とナイスな突っ込み。「中身はいっしょやる。アホちゃうか！」と切り捨てた。モルモン教ネタでの初笑いだった。

□ 投稿 「終末」の終わり

モルモン教の正式名称はご存知の通り「末日聖徒イエス・キリスト教会」だ。モルモンと言う名称に抵抗を感じて、正式名称を使用するように懸命であることも、皆が良く知るところだ。

モルモン教と言われてしまうと、キリスト教のカムフラージュが難しくなる。当事者の不快感は分らなくもないが、「末日」という言葉も問題ありだ。世の終わり直前と言う「末日」。この教義はモルモン教会の多くの都合の悪い教義と同様に何処かに葬り去られようとしている。

モルモン教の設立は1830年。すでに180年近くが経過した。モルモン教は世の終わり間近の人類救済よりも蓄財に必死である。客観的、常識的に見れば「末日」聖徒イエス・キリスト教会は既に名前からして破綻してしまっている。

20世紀が終わる頃、「ノストラダムスの大予言」がブームで「恐怖の大王」が降って来ると思っていた人たちがいた。モルモン教にも世紀の終わりにキリスト再臨があるのではないかとその漠然とした期待(信仰?)があつた。それがなかったのもモルモン教にとつては結構な痛手であつたと思う。思い出すのは大阪の阿倍野で行われた当時の大阪伝道部の主催によるファイヤサイドだ。そこではモルモン教徒のオカルト作家が講演を行っていた。そして、伝道部長は「教会員でない皆さん、是非宣教師の話しを聞いて下さい」と締めくくっていた。

世の終わりには自宗教の信者だけが救済されるという「終末思想」。それは特にモルモン教に限ったものではない。オウムもそうだった。エホバの証人もそうだ。終末論とはカルト宗教の特徴のひとつだ。

しかし、世の終わりはやってこない、終末論とともにカルトの教義も破綻する。カルト側は「実はまだその時期は来ていない」「事象に現れないだけ」などとの言い訳を用意する。これも定番だ。

聖書には再臨(終末)について書かれた幾多の文言がある。ヨハネの黙示録など忠実に読めば、ローマ帝国を滅ぼしてイエス・キリストは降りてくるということになる。本家の聖書にでさそうだ。再臨(終末)の予言など当たったことがないし、再臨(終末)ということ自体が虚像だ。

多様な宗教や価値観があふれる現在。善悪、正邪のふたつで割り切って、「最後は正義(すなわち信者)が勝つ！」などという単純なものがありうるはずがない。いまどきは時代劇でも通用しない。

「終末論」は終わっているのだ。しかし、尚もキリストの再臨信仰自体には意義がある、と私は思う。

終末論と再臨信仰とは似て非なるものだ。終末論は神が最後の瞬間に信者に代って反対者へする復讐することだが、再臨はそうではない。キリストの「十字架の死と復活」による悔い改めと同種のもの、延長線上にあるものだ。ひとりの人間の罪は人の力で克服できるものではない。それを贖うのがキリストの「十字架の死と復活」だ。人間社会も同様だ。ざっと世界を眺めてみても「核、大量破壊兵器の拡散」「宗教間対立」「テロによる新たな軍事的緊張」「環境問題」「異常気象」・・・などなど果たして人がこのままで解決できるのかという問題がめじろ押しだ。解決の困難さを突きつけられたとき、人の力を

うが、ここでは神の登場である。根本的な解決は罪を背負った人にできるものではないと認め、悔い改めてすべてをキリストに任せるといのものであろう。それは復讐や攻撃ではない。片方をやっつけるのではなく、己の無力を知って、相手の価値観を認め、融和することが再臨の意味だ。イエス・キリストの教えである。

とっくに破綻している終末論を教義として標榜する宗教など信じるに値しない。ましてや、モルモン教のようにこの世の富追求に方向転換するのは問題外だ。

■連載 リアホナを斬る (第11回) 木塚灯八
2007年1月号 霊的な知識の探求——ポイド・K・パッカー

モルモン教会の十二使徒であるポイド・K・パッカー長老は若い頃進駐軍の一員として日本に滞在したことがあり、近年来日したこともあり、日本のモルモン会員の中には親近感を持っている人が多いかもしれません。私はこの人については「堅物」「がんこ親父」のようなイメージを持っています。今月号のリアホナには、パッカー長老が1982年の新任伝道部長セミナーで語ったとされる説教が掲載されていますので、これを取り上げてみます。

タイトルには「霊的な知識の探求」とありますので、アカデミックな内容を期待したのですが、読み進めてみると相変わらずカルト宗教が信者の思考停止を促すような内容であり、知識の探求と呼ぶには程遠いものでした。では具体的に紹介して行きたいと思えます。

最初にパッカー長老は自分の体験を交えながら、神の存在は事実だがそれを言葉で説明して相手を納得させることはできないという話をします。パッカー長老は教会幹部になる前に以下のような経験をしたそうです。

あるとき飛行機で、無神論者を自認する男性の隣の座席になりました。神は存在しないと執拗に主張する彼に、わたしはこう証しました。「それは違います。神はおられます。わたしは神が生きておられることを知っています！」彼は反論しました。「知っているですって。そんなことを知っている人がいるもんですか！あなたが知っているはずがないでしょう！」その無神論者の男性は弁護士でもありましたが、わたしがどうしても折れないのを見ると、証というテーマに関して究極的とも言える質問をしました。彼はあざけるような態度で、わざと丁寧な口調でこう言いました。「そうですか。では、知っているとおっしゃるなら、どのように知っているのか説明してくださいませんか。」

ここでちょっと考えていただきたいのですが、私たちは通常、飛行機で隣に座っている人が無神論者であることを執拗に主張するという場面に出くわすでしょうか？ 普通は無いです。あるとすれば、それはこちらから相手に宗教の話を持ちかけた場合ではありませんか？ 宗教の話を持ちかけるという行為自体が非日常的ではありませんが、モルモン会員にとって日常茶飯事です。そうするようにモルモン教会は会員に求めているのですから。

パッカー長老の話を読めば表面的に読むと、まるで飛行機の隣に座った人から宗教上の攻撃を受けたようにも取れますが、よくよく状況を考えれば彼のほうから隣の男性にモルモン福音を伝えようとしたに違いないと思えるのです。そしてこの男性がいかに性格が悪いような印象を読者に伝えようとしています。実のところはパッカー長老がしつこく宗教の話をするので仕方なく相手になってやっただけなのでは無いのでしょうか？

いずれにせよパッカー長老はこの男性から説明を求められ答えに窮してしまうのです。それはそうでしょう。「信じています」と言えば「ああ、そうなのですか」となるところで「知っています」と言い切ったのだから、相手にしてみれば、なぜそこまで言い切れるのか？と聞き返してくるのは当然です。しかしパッカー長老は相手にうまく伝えることができず困っていたところ、何か心に注がれ、ある考えが浮かんだそうです。彼の話は続きます。

そのとき浮かんだ考えを、わたしはその無神論者の男性に言いました。「ではお尋ねしますが、塩がどんな味が御存じですか。」
「当たり前ですよ。」
わたしは続けました。「では、わたしが塩を一度も味わったことがないと仮定して、塩がどんな味が説明していただいただけませんか。」
彼は少し考えてから言いました。「ええっと、あの、甘くなくて、酸っぱくもなく。」
「それでは、どんな味ではないと言っているだけで、どんな味がするかにについての説明にはなっていませんよ。」
彼は何度か説明を試みましたが、できませんでした。塩の味というごく当たり前のことなのに、言葉だけでは説明できなかったのです。わたしはもう一度証しました。「わたしは神が実在されることを知っています。」
(中略)
厳密にどのように知っているのかを言葉で説明することはできませんが、それはあなたが塩の味を説明できないのと同じことです。
(中略)
あなたがそれを知らないからと言って、わたしまで知らないとはおっしゃらないでください。わたしは知っているのですから！」

この塩の味を引き合いに出した話術は、以前にモルモンの出版物で読んだり宣教師から聞いたことがありました。パッカー長老が出所なのかも知れませんが、しかし、自分が言い出した「神を知っている」ことを説明もできなくせに、相手に別の行為を求めてそれができなくなると、勝ち誇ったように「わたしは知っているのですから！」と宣言する厚顔さをみると、やはりパッカー長老は後にモルモン幹部となる資質をこのときすでに備えていたようです。

この相手の男性は別れ際に「あなたが信じている宗教に頼らなくてもやっつけます。わたしには必要ありません。」と言ったそうですが、確かにこんな人たちには関わりたくないと思ったことでしょう。

パッカー長老の説教はこの後もいろいろ続くのですが、以下の部分は特に興味深いです。

次のように言う宣教師は決して珍しくありません。

「まだ証がないのに、どのように証したらよいのですか。どうしたら、神が生きておられ、イエスがキリストであり、福音が真実であると証できるのですか。そのような証がまだないのに、証をするなんて、不正直ではないでしょうか。」

なんとも呆れる話ですが、唯一真の生ける神の教会の宣教師は、「まだ証がない」、「不正直ではないか」という悩みを抱えている者が「珍しくない」のだそうです。まともな宗教団体で、自分の信じているものに揺ぎ無い確信を持っていないのに、それを他人に伝えていることなどあり得るでしょうか？しかし、モルモン教会ではそれは「珍しくない」ことだと幹部が口にしています。これはモルモン教会の実態を示す好例です。

パッカー長老はこの事態を平然と受け止め、話を続けていきます。

次の原則をぜひ覚えてください。つまり、証は実際に証をしていく中で得られるものであるということです。

(中略)

本を読み、人の話を聞いて証を得るのは最初の段階として必要です。しかしそれは、自分が証したことが真実であるという確認を御霊から自分の心と与えられることは、次元が違います。証は、人に分かち合うときに得られるということが理解できるでしょうか。自分が持っているものを与えるなら、その代わりに、さらに多くが与えられるのです！

「最初の段階」とか「次元が違う」とか小難しい単語を並べているので学術的な話に聞こえますが、平たく言うと、パッカー長老の答えはこうです。

本当かどうか分からなくても、他人に本当だよと伝えれば、その事柄は本当だったと分かるようになる。

これほどふざけた欺瞞に満ちた回答があるのでしょうか？

結局、パッカー長老は真実が何であるかという説明は一切していませんし、モルモン宣教師たちも証が無いままに他人に伝えているのです。逆に言えば、モルモンの教義など信じていなくても宣教師になれるし、おそらく幹部にもなれるでしょう。モルモン教義というのは、それが真実であるとか信じているとかは全く関係なく、ただそれを伝えて会員を増やしたか、組織に貢献したかと言った点がモルモン教会において評価されるからです。

実のところモルモン幹部にとって教義や信仰の中身などは何でもよく、それを使って勢力拡大、利益追求ができればいいのではないのでしょうか？という観点でモルモン教会を眺めていくと、根本的な教義がコロコロ変わることや、伝統的キリスト教との対立から同調へ方針転換を企図していること、伝道先の政府関係者に熱心に取り入っていること、しかし献金の使途や組織の意思決定に一般会員の意見が反映される仕組みが無いことなどの理由が全て説明づけられてしまうのです。

口連載 思い出す 私と勇氣と真実の会 (1) 会の設立まで

昨年秋をもって私は勇氣と真実の会から離脱しました。同会の設立から私は参加し、会の中核メンバーでした。勇氣と真実の会設立は1999年の5月ですから、7年以上となります。それは同時に私の反モルモン活動そのものだったと言っても過言ではありません。本号から数回に分けて、私個人と勇氣と真実の会の今までを振り返って見たいと思います。

Windowsが97となり、インターネットがぐっと身近になったころ、私もノートパソコンを購入し、パソコン通信からインターネットへと転身したのでした。当時の自分自身を思い出してみると、モルモン教からは実質脱会している状態でした。批判的な思いは持っていましたが、特に何か行動を起そうとしていたわけではありませんでした。そのような活動は必要ではないか、との漠然とした思いはありましたが、具体的な方策を持っていたわけでもありませんでした。それでも、見よう見まねで作ったホームページの奥にモルモン教批判の記事は書いていました。それは、現在は大幅に書き改められていますが、「常識で読むアブラハムの書」でした。

<http://garyo.or.tv/abraham/abraham.htm>

記事を上げてしばらくして、監督からじきじきに電話を受けました。この記

のページの削除を要請されました。もちろん、拒絶しましたが、インターネットの影響力を実感した最初の出来事でした。

その時、所謂反モルモンサイトなるものとしては森英樹氏の聖徒の未知が唯一存在していましたが、私はその存在を知りませんでした。むしろ、「モルモン」や「末日聖徒」で検索した時、ヒットするのはモルモン教徒自身の信仰告白のホームページばかりでした。それらの内容のほとんどは現在のモルモン教徒の擁護サイトの内容と少しも変わっていません。逆に現在のモルモン擁護サイトは全く進歩していないと言えます。そんななかでも、もっとも規模の大きかったサイトはチャーハンというハンドルネームのモルモン教徒が主催しているLDSフレンドというものでした。そこには「LDS情報掲示板」というBBSもありました。なかなか意欲的かつ画期的サイトでした。

そのBBSをロムしているうちはよかったのですが、たまらずモルモン教徒と議論を始めてしまったのが、本格的な反モルモンとしての第一歩だったといえるでしょう。

最初に議論に飛び込んだのは、性同一性障害のモルモン教徒の悩み相談に対してであったと思います。戸籍上は男性、心は女性と言う方で、性転換手術を真面目に考えているという内容に対して、浴びせられた言葉は極めて侮辱的でした。この障害を罪と断じ、直ちに神に赦しを請う事、そして今後は全ての欲を絶って残る生涯をモルモンの伝道者として生きようことを勧めていたのです。そして、このレスの末尾にはこの方が赦されるように神様にとりなす祈りまで、書かれていました。私には到底これを放置することは出来ませんでした。

このとんでもない回答者（現在はどうしているのでしょうか？）にはかなり手厳しいコメントをつけました。これに対してこのモルモン教徒は「私の祈りを邪魔した」と怒って来ました。BBSに文章を書き込む祈りがあるものかどうか、モニターの前で私は大笑いしましたが、同時に背筋に冷たいものを感じました。

相談主さんへのコメントはデーターが残っていました。その一部を載せます。

--*-*

> 将来的には性転換手術をして、女性になりたいと考えています

ということからして、男性に愛情を感じられるんですね・・・

**さんの性別は「男性」だと思のですが、だとすれば、どんなキリスト教でもそうだと思うのですが、「同性愛」は問題なんではないでしょうか・・・女装とか、性転換手術とかの問題以前であると思うのです。

ただ、それはあくまでもキリスト教の「教会」とその世界の話。聖書はちよつと違う見解を示しているかなって思ったんです。

以下はホント私の個人の見解です。私なりの聖書の読み方です。それはご承知ください。

主が肉体を持ってこの世にイエスという名で来られた時、先祖あるいは本人の前世での罪で「ハンセン氏病（らい）」になったり、視聴覚障害・身体障害を持って生まれたという考えが常識であったと思うのです。もちろん彼らに罪はありません。救い主は彼らのところに積極的に入っていかれました。そして奇跡を行われたのです。それは病人が治癒するとか、障害者が健康者になるということだったのです。

ちよつと聖書を引きます、ヨハネによる福音書9章から

「『この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも両親ですか。』イエスはお答えになった。『本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである・・・』」

ここで、視覚障害者のことを理解していない、当時の人々を笑うことは簡単です。しかし、私たち人はまだまだ生命というものが解っていないということでは将に五十歩百歩。もし、イエスが今来られたら多分**さんの性同一障害にも理解を示されると思うのですよ。

--*-*

拙い文章ですが、私のスタンスが既にこのことから読み取れます。また、性差別の問題が「反モルモン」へのスタート点であったのも私らしいと思えます。このLDSフレンドのBBSで、やっくんと言う脱会モルモンと出会いました。彼も厳しいモルモン批判の書き込みをして来ました。私とはすぐに意気投合しました。

そして、彼からそれまで知らなかった「聖徒の未知」の存在を聞きました。その内容は私にとっても大変な驚きでした。そして、そのコンテンツの中で私が考察した「アブラハムの書はエジプトの死者の書である」が裏付けられてことはうれしかったです。そして、考察を続けて行く励みにもなりました。

しばらくしてやっくんが「反モルモンのメーリングリストを作ろうかな」と言う書き込みをBBSにしました。そして、それに前後して反モルモンを組織化しようと言う動きがはじまりました。もちろん私はすぐに参加を表明しました。

やっくんを管理者としてメーリングリスト（ML）ができたとき、彼の人脈と呼びかけで、聖徒の未知作成者の森氏をはじめモルモンに批判的な人たちだけでなく活発モルモンもメンバーに連なっていました。このMLは議論ができる方ならモルモン教徒でも参加OKでした。

現在広島で教養英語の教員をしているN、ポルノ小説問題で副監督を更迭されたH、イリアンタムと言うモルモン教徒専用メーリングリストの管理者のMなども加わっていました。

しかし、彼らは議論が深まるにつれて何かと理由をつけてMLを脱退して行

知った上で辞めているのに対して、モルモン教徒は外側のことを知らないし、知らされてもない。もっと言うとしてはいけないとまで言うのですから。彼らが議論に惨敗するのは当然でした。Nなどは最後には「実はジョセフ・スミスが預言者だったなんて信じてない。モルモン書も彼の創作だ」と告白しました。そして、あまりにも長時間モニターを見続けたため視力が落ちて来てしまった。PCからは離れざるを得ない、と言ってMLを抜けていきました。Hは仕事が忙しい。「こんなところで議論しているよりも、しっかり地に足をつけて働くこととする。銀行が倒れても私（注：Hは自営業）は倒れないぞ」と言って去って行きました。

この二人はその後、どうしているのでしょうか。Nは心にもないモルモン擁護をモルモン教徒のBBSや自分のブログで揚々と継続しています。視力も回復したようです。Hは自分でBBSを作って発言していますが、職場からアクセスしています。仕事に集中すると見栄を切っていたのですが・・・このふたりを見るだけでもモルモン教徒の不真面目さ、でたらめぶりが分ってしまいますね。

やっくんの管理するMLではモルモン教徒との議論ばかりではありませんでした。悩みや相談も真剣に議論されており、それがMLの中心でした。そして、そんな中いよいよ勇気と真実の会が組織化されて行ったのです。（続く）

□おしらせ

●本誌名称変更のこと

号外にて連絡の通り、本号から「勇気と真実の会 電子会報」を「ぜみななるモルモン通信」と名称変更してお届けしています。

●投稿記事募集

脱会体験、モルモンについて思うことなど、なんでもお寄せください。文はプレーンテキストで作成ください。

投稿先は末尾メールアドレスにお願いします。

●高橋弘先生の連載「モルモン人物伝」は休載します。

先生は現在、ブリガム・ヤング分析を中心とした初期ユタ開拓史の新著のラストスパートにかかっておられて、お休みのやむなしに至りました。

尚、新著は3月末に出版されるとのこと。ご期待下さい。

★メールマガジンバックナンバーはこちら

<http://garyo.or.tv/mm/tusin.htm>

- | | |
|----------|---|
| ・発行者 | るう@大喜多秀起 |
| ・ホームページ | http://garyo.or.tv/ |
| ・メールアドレス | ruu_hideki@bb.excite.co.jp |

【解除はこちら】

<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/m/9211.html>

このメルマガはお客様のご登録に基づき、カプライトより配信されました。
解除希望・お心当たりがない方は <http://kapu.biglobe.ne.jp/regist.html>

【みんなで決める！全国シネマ投票】■■現金総額1000万円！■■
毎日出題される映画についての“お題”に投票して、現金を当てよう！
今すぐ投票 >> <http://cinesc.cplaza.ne.jp/rdt/cine-vote/jishakou2.html>
